



新館長より ごあいさつ

今春、中部大学民族資料博物館に新たに着任された館長と副館長より、一言ご挨拶申し上げます。

このたび新館長として着任いたしました、中野智章(なかの・ともあき)と申します。今回は着任のご挨拶として、自己紹介かたがた、これまでの拙い歩みを振り返りつつ、弊館に対する想いの一端を述べさせて頂きたく存じます。

まず私的な事柄ではございますが、小職と中部大学との関わりは今から40年以上前の小学生の時分に遡ります。親の転勤で高蔵寺ニュータウンの藤山台に転居した小学5年生の折には、中部大学を含む松本町周辺が私の遊び場でした。研究者としての専門は考古学で、主にエジプトが対象ですが、その頃には自転車で近くの岩船神社や廻間古墳群を良く訪れ、また年代はかなり遡りますが、周辺の化石探しにも明け暮れたところでした。

その後、大学では人類学(考古学と民族学)を専攻しましたが、中部大学に人類学の錚々(そうそう)たる研究者を

集めた国際関係学部が創られたことは学生間で話題になっておりました。また、当時は大学生活の大半を付設の人類学博物館で過ごし、資料整理や展示のアルバイト、博物館実習の教務助手などを務めましたので、同じような地域・分野のコレクションを持つ中部大学の民俗資料室(当時)は常に気になる存在として頭の中にありました。

ついで大学卒業後はイギリスに渡り、エジプト学(古代エジプト文明を研究する学問分野)を学びましたが、そこでは世界で最も古いとされる大学博物館が学び舎となりました。それからイギリスと日本、エジプトを行き来しながら、縁あって1996年から非常勤講師として中部大学で教えることが叶い、東京の池袋にある古代オリエント博物館の学芸員を経て、2009年より本学の教員となり現在に至っております。他には専門のエジプト文明に関する展覧会を監修す



中野 智章

なかの・ともあき

中部大学民族資料博物館 館長
中部大学国際関係学部 教授

る機会を頂き、惜しまれつつ閉館となった名古屋ボストン美術館など、各地の博物館や美術館で多くのことを学ばせて頂きました。近年では、京都大学総合博物館に所蔵される古代エジプト資料の監修なども担当させて頂いております。

こうして振り返ってみると、自身の研究者人生には、常に博物館が関わっていたことに気づかされます。(次頁へつづく)

索引

- | | | | |
|--|---|----------------------------------|----|
| ◇巻頭 | 1 | ◇講演記録 | 6 |
| 新館長よりごあいさつ | | 松浦晃一郎コレクション(アフリカ木彫)についての講話および座談会 | |
| 中部大学民族資料博物館館長・国際関係学部 教授 中野 智章 | | 中部大学民族資料博物館 原田 千夏子 | |
| ◇新副館長よりごあいさつ | 2 | ◇常設展示 | 7 |
| 中部大学民族資料博物館副館長・応用生物学部 環境生物科学科 教授 大場 裕一 | | 常設展示アフリカ地域のコーナー展示再編の試み | |
| 2023年度 活動報告 | | 中部大学民族資料博物館 原田 千夏子 | |
| ◇実技講座 | 3 | ◇教育普及活動 | 8 |
| 2023年度特別講座(古典絵画)開講 | | CAAC授業「旅と文学」内見学 | |
| 課題制作:屏風作品制作(風炉先屏風制作1年目) | | ◇施設利用 | 8 |
| 日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員 下川 辰彦 | | 小学校スタンプラリー見学 | |
| ◇企画展(成果発表展) | 4 | ◇トピック1 | 9 |
| 特別講座(古典絵画)2022年度受講生作品展 | | 館ホームページのリニューアル(大学新サイトへの移行) | |
| 一画絹に描く〜扇面と短冊 | | ◇トピック2 | 10 |
| 中部大学民族資料博物館 原田 千夏子 | | 三浦幸平メモリアルホール | |
| ◇企画展 | 5 | 三浦幸平記念室のリーフレット制作 | |
| 2023年度秋季企画展 | | 2024行事案内 | 10 |
| 「松浦晃一郎コレクション(新規寄贈彫刻)一彫刻から見たアフリカ」展 | | | |
| 中部大学民族資料博物館 原田 千夏子 | | | |
| ◇交流 | 6 | | |
| 国立民族学博物館長 吉田憲司先生の松浦コレクション見学 | | | |
| 中部大学民族資料博物館 原田 千夏子 | | | |

エジプトやイギリスをはじめ、海外の博物館を展覧会の準備や資料の調査等で訪問し、先方の学芸員と共に作業をする機会も多く、特色ある展示や教育プログラム、ミュージアムショップのあり方などに瞠目することが良くありました。中でも大学博物館に関しては、教育や研究の場として活用される様子を体験するとともに、社会に開かれた空間であることも実感したところです。

無論、これらは専門のエジプト学や考古学を通じた知見に過ぎず、見落としている面も多々あるかとは存じますが、そのような経験から学んだ「実物を通して考える」ことの意味や重要性は弊館でも大事にして参りたく考えております。幸い、中部大学は工学、経営情報学、国際関係学、人文科学、応用生物学、生命健康科学、現代教育学、理工学という幅広い学問分野を網羅し、多彩な教育研究が日々

広大なキャンパスのあちこちで推進されていることから、学問の蓄積を活かした展示や、最先端の研究を「民族」や「地域」といった国際的な視点も絡め紹介できる場でありたいと願っている次第です。つきましては弊館の展示や企画に是非ご期待を頂き、一人でも多くの方に足を運んで頂けましたら幸いに存じます。皆さまのご教示ご鞭撻をどうぞ宜しくお願いいたします。

新副館長より ごあいさつ

このたび中部大学民族資料博物館の副館長に就任いたしました大場裕一（おおば・ゆういち）と申します。世界の民族資料を中心に4千点以上の収蔵品を有するこの特色ある大学博物館の運営に携われますことを喜ばしく思いますとともに、その責任に気の引き締まる思いがいたします。

現在、私は中部大学応用生物学部の教授を務めております。専門は、発光生物学、つまり光る生き物の科学です。きのこやホタルや深海魚には光る種がたくさんいます。ミミズにもカタツムリにも光る種がいます。そういった発光生物を自然の中から探し出したり、その発光する仕組みや発光の役割を研究しています。どうしてそんなもの（役に立たないもの）を研究しているのか？とよく人に言われるのですが、「だって面白いじゃない！」——と答えたのは私の恩師の先生でした。そうか「面白いから」という好奇心だけで研究をしてもいいんだ、と大学生だった当時の私は目を開かれた思いがして、それから発光生物ひとすじです。

そんな私がなぜ当館の副館長を拝命することになったのかと言われますと、その理由の一番は、中部大学蝶類研究資料館の館長を兼任しているからである、と申し上げられましょう。こちらは、主に日本全国各地のチョウの標本29万頭を有する中部大学の附属施設で、日本産蝶類の標本コレクションとしては質・量ともに世界最大のものとなっています。我々は、この貴重な標本群を半永久的に保存し、さらにそれを教育と研究に活用することを任務としていますから、まさにその精神は当民族資料博物館と全く同一であると言えます。また、社会に開かれた学びの施設でなくてはならないという点においても、理念と想いは同じであります。なぜならば、博物館こそが不思議と発見と驚きに満ちた知的好奇心の殿堂に他ならないからです。

そもそも「学び」とは、文系／理系、さらには年齢や職業、国籍までもを超えたりバレルアーツに他なりません。私の専門知を当館の運営に生かすことで、中部大学が目指す総合知



大場 裕一

おおば・ゆういち

中部大学民族資料博物館 副館長
中部大学蝶類研究資料館 館長
中部大学応用生物学部環境生物科学科 教授

にささやかながらでも貢献できればと思います。背景の異なるさまざまな一般の方々から学生まで、どうぞ当民族資料博物館にご来館いただき、知的な好奇心にあふれた皆さまと共に人類の総合知を創出するきっかけ作りができれば幸いです。どうぞよろしくお願いいたします。



4
2023 月
|
1
2024 月

実技講座

2023年度 特別講座(古典絵画) 開講

課題制作：

屏風作品制作(風炉先屏風制作1年目)

| 期間 | 2023年4月19日(水)～2024年1月17日(水)

| 場所 | 中部大学10号館106Jゼミ室

受講者数：13人(有料・定員制・通年)

指導講師：下川 辰彦 (日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員)

担当：原田 千夏子 (中部大学民族資料博物館)

特別講座(古典絵画)では、日本画の実技制作について、さまざまな基底材による日本絵画を制作することをテーマに始め、これまでに絹絵、板絵、古画の模写、箋紙、短冊、屏風の小下図等を課題に取り上げてきた。2023年度は、屏風のなかでも茶室に用いる「風炉先屏風」を2年間かけて制作することにした。2枚の作品を左右に連結して広げて室内に設置する定番の型式であるものの、本講座では、作品の向きについては横型、または縦型のいずれでもよいということとし、画面の構造

を作品世界の表現に活かすことも念頭におきながら、どのような構成をとるか、各自が趣向を凝らして工夫できるように設定した。モチーフを伝統的なものとするか、または自身の独創性を求めるか、さまざまな考え方で作品に向き合うことが個々の意欲的な制作につながると考えている。

今回の屏風制作は、これまでのような個々の習作と異なり、所定の屏風と同じ作りのものに描くことになり、比較的大きなサイズを取り扱うことから、博物館側と相談し、教室における

収容人数も限られることや、一回の講座内で指導に要する時間的な面から、開講するにあたっては、ある程度の経験を持つ方に人数を限定して募集することとなったことは、ご理解をいただければ幸いである。受講いただいた方には、下地作りの段階から、特別な地塗りや箔の方法を駆使するなど、集中力の要る工程を重ねる点で根気強さを保持いただくことをお願いしつつ、日本絵画の特有の材による表現の美しさに通じる過程としてぜひ紹介していきたいと思っている。(下川)



特別講座の教室風景 和紙の種類による指導
(右・指導講師の下川辰彦先生)



地塗りによる下地作りの指導
(左・記録撮影する補助の学生)

● 特別講座担当より ●

2024年4月現在、風炉先屏風の制作は2年目に入りました。1年目に、画面の下塗りの複雑な工程を学びながら入念に準備し、今年はいよいよ本格的な彩色の工程となります。指導講師の下川先生、渡邊美喜先生(2021年度の本講座に指導講師として参加)のほからいにより、講座内で用いるようにと日本画の数多くの貴重な岩絵具、水干絵具を提供いただきました。受講生全員で分けながら、大切に使いしていきたいです。

3
2023 月

5
2023 月

企画展(成果発表展)

特別講座(古典絵画) 2022年度受講生作品展 一 画絹に描く～扇面と短冊

Ⅱ 期間 2023年3月22日(水)～5月31日(水)
(会期中に指導講師による講評会を実施：2023年5月31日)

Ⅱ 会場 中部大学民族資料博物館 シルクロード室、
附属三浦記念図書館 1階エントランス

主 催：中部大学民族資料博物館 (出品点数 45 点)
企 画：下川 辰彦 (日本美術院特待・中部大学民族資料博物館 外部専門委員)
：原田 千夏子 (中部大学民族資料博物館)

入場者数：477人

特別講座(古典絵画) 2022 年度の受講生作品展は、課題制作の「扇面と短冊」とあるように、扇の形状をした作品と縦長の短冊の形状をした作品を組み合わせる作品が披露された。一つの作品は、扇面の形状をした作品 1 点を中央に置き、その左右に短冊の形状の作品を各 1 点ずつ置くという、計 3 点で一式とする内容である。小品ながらこのような複数の作品を組み合わせる制作については、指導講師の下川辰彦先生による提案である。そのねらいは、成果発表からみてとると、事物や事象を全て描きこむのではなく、そのうちどの部分をどのように切り取り表現するかによって、観る者が想像をかりたてられる面白い

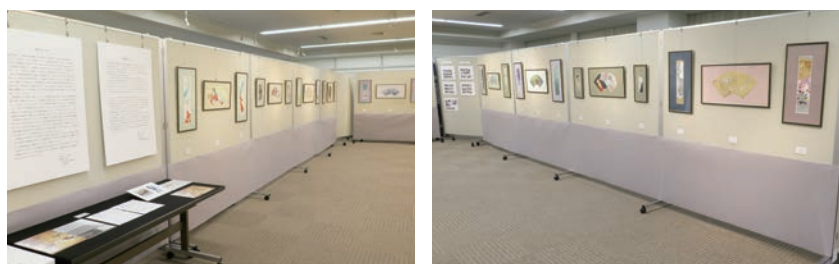
世界が生まれることを実感させるところにあったようである。異なる画面を組み合わせた際に、観る者はそこに何らかの関係性を自ずと想像させられ、物語をイメージしてしまうという不思議な感覚を持つ。制作者と鑑賞者が、互いにその新鮮な感覚を楽しむ空間が生み出されるのである。このような味わい方を、作品講評会の場に集まった受講生らの表情から、同じように感じ取ったようであった。

説明を極力省き、わずかなモチーフによって、その周囲の世界を暗示的に表す。一種の謎掛けのような空間への誘いを思う日本美は、例えば、書院造の書斎の間や円窓、孤篷庵忘筌の縁先の引違い二枚障子から眺める



受講生作品展ポスター

庭、限られた文字数で詩情を詠う俳諧の世界などが思い出される。身近な日常の景色から何を選択するか、その感性を座に集う仲間とともに味わう対話の空間、かつて床の間がそうした場にあった。今回の課題の精神はここから出発していると思われる。現代では、洋間を主体とした生活空間が主流となり、絵画の鑑賞のかたちも多様化しているなかで、古典と現代とが融合する、今を生きる私たちが楽しむことのできる鑑賞のあり方を提案いただいたと思う。(原田)



展示会場風景



同展会期中に実施した講評会の様子
(右・指導講師の下川辰彦先生)

10
2023 月

|

12
2023 月

企画展

2023年度秋季企画展

「松浦晃一郎コレクション（新規寄贈彫刻） — 彫刻から見たアフリカ」展

【期間】 2023年10月26日(木)～12月15日(金)
【会場】 中部大学民族資料博物館 シルクロード室、
附属三浦記念図書館 1 階エントランス

主 催：中部大学民族資料博物館（出品点数 34 点）

入場者数：759 人

第8代ユネスコ事務局長で、本学園の学事顧問を務められた松浦晃一郎氏より、2021年と2023年に寄贈を受けたアフリカの木彫の仮面や彫刻資料、約30点余りを紹介する企画展を開催した。松浦氏は、本学園の飯吉厚夫名誉総長（前理事長）との交流のなかで、まず2016年に約100点ものアフリカ木彫資料を寄贈いただき、以来、当館では、松浦コレクションと称して常設展示の一角にコーナーを設けてきているが、その後、続いて寄贈いただいたことを記念し、今回の企画展では新規寄贈資料を初公開する場を設けることとなった。

松浦氏は、外交官時代から初任地がアフリカのガーナであられたことを始めに、アフリカの歴史文化に興味を深められていったという。その後もアフリカとの縁を重ねられ、ユネスコ事務局長時代にはアフリカの国数が当時全53ヶ国中、実に52国を訪問されるという真摯な活

動を実現されている。現地の人々との直の触れ合いを通じて、戦後の独立化による紛争やイスラーム化による無形文化遺産の消失への危機の高まりを叫ぶ声を受け止められたことも契機となり、松浦氏は2003年のユネスコ無形文化遺産の採択にむけて尽力された。松浦氏のこうした活動を知っていくほどに、氏がアフリカ彫刻を身近にどのような思いで眺められていたのだろうか、と想像すると、目の前の彫刻に対して、また違った味わいを感じた。国際的な舞台において、民族という単位に心を寄せながら、人と人とのつながりを礎に活動された先人の姿の息吹を、一人でも多くの若者に紹介していくことの意義を、企画展を通じてあらためて思いを深めた。

今回の企画展準備では、本学の古澤礼太准教授（中部高等学術研究所／国際ESD・SDGsセンター／アフリカ都市文化研究）と大橋岳准教授（人間力創成教



秋季企画展ポスター

育院／霊長類学）に協力いただいた。両先生には、アフリカの都市文化、および自然環境保全の現況について、それぞれの専門分野の観点から図録に寄稿もいただき、多様性に富むアフリカの、現代の一側面を教えていただいた。その内容については、企画展会場の一角に、研究パネルや映像モニターの放映をするコーナー展示によって紹介の場を設けた。また、同じコーナーには、本学のアフリカ研究者関連書籍を合わせて展示し、閲覧できるようにした。各研究者の研究過程には、それぞれの熱い物語があることと想像される。今回は企画展会場内で極小さなスペースに留まったが、その道程については、学生へ向けたメッセージとしてまた何らか別のかたちで紹介できればと思う。

（原田）



展示会場風景



会場内の中部大学アフリカ地域研究者
関連研究パネル発表と書籍コーナー

国立民族学博物館長 吉田憲司先生の 松浦コレクション見学

Ⅵ 日時 Ⅵ 2023年12月7日（木）

Ⅵ 場所 Ⅵ 中部大学民族資料博物館 企画展会場（シルクロード室）、
常設展示室 他

見 学：吉田 憲司 氏（国立民族学博物館長）

対 応：荒屋鋪 透（中部大学民族資料博物館長）当時

原田 千夏子（中部大学民族資料博物館）



企画展会場における見学風景
（左：吉田憲司氏、右：荒屋鋪館長）

2023 秋季企画展会期中に、アフリカの仮面文化の専門研究者で、国立民族学博物館長の吉田憲司先生に来館いただき、当館館長と交流いただく機会に恵まれた。

アフリカ大陸は多様な気候風土において、数多くの民族が暮らし、それぞれ特有の歴史文化を持つ。仮面の特徴にしても実にさまざまである。吉田先生によれば、仮面は本来、単体で扱われるのではなく、祭礼の場で人間が身につけ、歌や音楽、舞踊とともに在るものといわれる。一方で、その環境は、19 世紀前後の植民地時代における欧米における一部の流出、戦後の内乱や紛争の時代など

を経て、祭礼の場から切り離されていくという変化を余儀なくされる。吉田先生は、松浦コレクションを一つ一つ丁寧にご覧いただき、なかには祭礼用に用いられていた痕跡と考えられるいくつかの特徴についてご教示くださった。そのような目線で鑑賞していくと、にわかに、その像がかつて人の顔に装着され、激しい踊りや祈りの所作とともに、人々とともに在った風景を思わず連想した。美術博物館における鑑賞は、「もの」を通じた自己との心の対話ともいわれるが、アフリカの仮面は、生命の存在を感覚的に共有するような、瞬間的な発露の力強さが観る人

を圧倒してくる思いがし、ほんのわずかな瞬間ではあったが、不思議な気分を味わった。

その他、吉田先生より、国立民族学博物館における活動のお話のなかで、保存技術を諸外国の学芸員や文化財に関連する若き担い手を対象とした研修を継続されていて、長年の活動が国相互の連携につながっていることを実感されているとのことであった。戦争の報道が耐えることのない今日、国、民族間の相互理解の土壌を育むために、文化交流の地道な積み重ねを続けることの大切さをあらためて考えさせられた。（原田）

松浦晃一郎コレクション（アフリカ木彫） についての講話および座談会

Ⅵ 日時 Ⅵ 2023年12月18日（月） 14：00～15：30

Ⅵ 場所 Ⅵ 中部大学民族資料博物館 シルクロード室

題 目：松浦晃一郎コレクション（アフリカ木彫）について

講 師：松浦 晃一郎 氏（第8代ユネスコ事務局長・学校法人中部大学 学事顧問）当時

司 会：篠塚 隆 氏（一般社団法人アフリカ協会特別研究員・前在モロッコ日本国大使）

参 加：荒屋鋪 透（中部大学民族資料博物館長、人文学部教授）当時

古澤 礼太（中部大学 中部高等学術研究所 国際ESD・SDGsセンター 准教授）

大橋 岳（中部大学 人間力創成教育院 准教授）

撮 影：野寄 誠（中部大学 学園広報部制作課 担当課長）



仮面の特徴について解説する松浦氏

松浦コレクションの企画展を記念し、この機会にコレクションの収集者である松浦晃一郎氏に来館いただき、コレクションにまつわるお話をいただくことをお願いし

たところ、快くお受けいただいた。

当日は、松浦氏が会長を務められている一般社団法人アフリカ協会特別研究員の篠塚隆氏に司会をお願いし、聞き役として当館館

長、そして企画展に協力いただいた古澤礼太准教授（アフリカ都市文化研究）、大橋岳准教授（霊長類学）に参加いただいた。撮影前半に松浦先生に想い出深い展示資料につ

いてお話をいただき、撮影後半には、松浦氏を参加者が囲みながら座談会のかたちで、アフリカ文化についてお話を聞きました。多様なアフリカ文化に対して、松浦氏が仮面文化を通じて、丁寧に民族の暮らしをみつめてきた眼差しを感じる時間となった。これらの記録は、松浦コレクション関連情報として整理し、今後の解説に活かし、学生へ向けて紹介していきたい。

(原田)



座談会の様子

(中央) 松浦晃一郎氏、(右) 司会 篠塚 隆氏
(左から) 大橋准教授、古澤准教授、(右から二人目) 荒屋鋪館長

2
2024 月
|
3
2024 月

常設展示

常設展示アフリカ地域のコーナー展示再編の試み

| 期間 | 2024年2月～3月
| 場所 | 中部大学民族資料博物館
常設展示 (第2室 地域研究エリア・アフリカ)



再編後のアフリカ地域のコーナー (全体)

2023秋季企画展の終了後、企画展に出品した新規寄贈資料を中心に、常設展示の松浦コレクション展示コーナーの展示資料を一部入替え、コーナー全体の資料配置を再編した。松浦コレクションは仮面文化が盛んな特に西アフリカの資料によって構成されていることから、2023年度の企画展においては、西アフリカ

のギニア湾沿岸西部、同東部、そして内陸部の3つのエリアに区分して、それぞれの地域の民族の生業や歴史に触れながら紹介したことから、常設展示においても、できるだけこのエリア毎にまとまりをもたせて展示資料を配置するよう心がけた。

当館の常設展示の後半部分は、展示ケースにあえて納めない、ハ

ズ・オン展示としているスペースがある。松浦コレクションにおいても、一部が該当する。より展示資料に近づいて鑑賞することができることから、仮面の持つ不思議な迫力に、至近距離からもご覧いただくことができ、彫刻の表情を様々な角度から鑑賞していただければと思う。

(原田)



新規設置の解説と地図パネル



(新区分) 西アフリカ 内陸部



(新区分) 西アフリカ ギニア湾沿岸西部・一部東部含む



(新区分) 西アフリカ ギニア湾沿岸東部

スタッフの声

企画展会期中から冬季期間にかけて、展示ケースの温湿度データの集計を主に担当し、木彫資料の乾燥回避に向けてシーズンを通して注意を払いました。その後の展示資料の入れ替え作業では、運搬で使用する専用箱や緩衝材の準備にあたり、木彫資料を傷めないよう、用材の種類や量を多めに調整するなど心がけました。その他、企画展の終了とともに、館内の体験実習室の図書コーナーと常設展示再編コーナーの一隅に、企画展関連書籍を移動しましたので、新たにこちらで手にとってご覧いただくことができます。（梶藤）

展示のキャプションカードや解説パネルの印刷時の文字レイアウト調整を主に担当しています。今回のコーナー再編にあたっては、2020年度の常設展示改編時から使用している従来のフォーマットをいったん見直し、文字のサイズやフォントについて、サンプルを幾つか作成し、スタッフ間で来館者の視点をもとに再検討する打合せを重ねました。新たに、コーナー展示内の資料グループの区分表示を加える際には、表示の形状や文字の色みなども工夫してみました。（宮沢）

11
2023 月

教育普及活動2

CAAC 授業「旅と文学」内見学

Ⅱ 日時 Ⅱ 2023年11月17日（金）

授業担当：岡本 美和子（CAAC 授業「旅と文学」講師）
作品解説：原田 千夏子（中部大学民族資料博物館 学芸業務兼務）
参加者数：20人

内 容：所蔵資料について解説と鑑賞
解説題目：《源氏物語絵巻》絵とその時代性について

- ・絵巻の様式的特徴
- ・大和絵の絵具
- ・彩色の発達と四季
- ・時代性～仏教の地獄と極楽、人間の内面をみつめる

対象作品：中部大学蔵の大和絵の模写作品
《模写 源氏物語絵巻「柏木（三）」》（原本 徳川美術館本）
《模写 扇面古写経絵図》（原本 東京国立博物館本）
《模写 平治物語絵巻 六波羅行幸巻》（原本 東京国立博物館本）
日本画の顔料と染料の重ね塗りの色見本パネル
（制作：中部大学民族資料博物館、協力：下川辰彦 外部専門委員）



館職員による作品解説の様子

1
2024 月

施設利用

小学校スタンプラリー見学

Ⅱ 日時 Ⅱ 2024年1月26日（金）

実 施 校：春日井市立北城小学校
（担当/国際・地域推進部地域連携課）
参加者数：100人
内 容：展示室にてスタンプラリー式鑑賞



見学風景

館WEBサイトデザインのリニューアル (大学の新WEBサイトへの移行)

URL <https://www.chubu.ac.jp/student-life/facilities/museum/>



館WEBサイトトップページ

2022年に大学のWEBサイトデザインがスマートフォン対応用にリニューアルされたことを受け、館のWEBサイトページも大学サイトのデザインへ2023年度に移行しました。これにともない、表記項目の見直しを行いました。館サイトのトップ画面に、最新の「お知らせ」情報記事、下層に設定した「コンテンツメニュー」の項目表示、「施設案内」(アクセス案内を含む)を掲載し、利用者向け情報をより優先した構成となっています。

「コンテンツメニュー」には、「主なコレクション」、「企画展・活動」、「民族資料博物館について」、「主な施設」、「開館情報カレンダー」、「各種申請」を表示し、用途別に館の活動等を紹介しています。

特に、「開館情報カレンダー」には、平日の開館日以外に、別途で大学催事日や祝日の授業日等の年間の特別開館予定日を掲載しています。ぜひご参照ください。

コンテンツメニューの主な構成

- **主なコレクション** 常設展示／常設展示室、シルクロード室(第1室)、地域研究エリア(第2室)
主なコレクション／主な展示紹介／中部大学WEBミュージアム
- **企画展・活動** 現在開催中の展示案内記事／2023年度 催事
活動記録(開館から現在までの主な企画展、講演の記録)
- **民族資料博物館について** 博物館が目指す姿／沿革／目的
民族資料博物館の活動記録／館長挨拶／刊行物
- **主な施設** 常設展示室、シルクロード室(第1室)、地域研究エリア(第2室)、
学習スペース、多目的室 他
- **開館情報カレンダー** 開館情報カレンダー(直近2ヶ月のカレンダー掲載)
当該年度の特別開館予定日
- **各種申請** 団体見学、写真撮影・掲載、資料調査の各申請手続きのご案内



同ページつづき



同ページつづき



「開館情報カレンダー」の
案内ページ

三浦幸平メモリアルホール 三浦幸平記念室のリーフレット制作

学内のメモリアルホールの1階にある「三浦幸平記念室」では、本学園の戦前から戦後にかけての草創期に、創立者の三浦幸平が関係者とともに歩んだ足跡を、学園の記念資料とともに紹介しています。民族資料博物館では、本学の歴史資料を調査する活動のなかで、2022年度に展示資料の計測と写

真撮影をし、その記録情報と学園の関連史料をもとに、2022年度に展示資料を年代別に画像とともに記録する冊子形態を作成しました。続く2023年度は、一般配布用として、同室を紹介する簡易リーフレットを作成しました。入室いただいた方に気軽に手に取っていただけるサイズとなっています。



三浦幸平メモリアルホール 三浦幸平記念室リーフレット

主な構成

- 建学の精神／
三浦幸平メモリアルホール 三浦幸平記念室
- I 三浦幸平の修学時代・教員時代
- II 学園の草創期の歩み
- III 三浦幸平の座右宝
- 関連施設のご案内

設置場所

三浦幸平記念室(1号館1階受付、民族資料博物館)



〈表面〉



〈中面〉

2024

行事案内

MUSEUM OF ETHNOLOGY ART CHUBU UNIVERSITY

◇ 2024 秋季企画展

2024 秋季企画展「江戸の牡丹ブームと芭蕉」(仮称)

会期：2024年10月15日(火)～12月20日(金) 予定 会場：民族資料博物館 シルクロード室
*会期中に講演・ギャラリートークを実施

◇ 2023・2024 企画展

「特別講座(古典絵画) 2023・2024年度受講生作品展 (風炉先屏風作品)」

会期：2025年3月21日(金)～5月30日(金) 予定 会場：民族資料博物館
*会期中に指導講師による作品講評会を実施